

# C I S M O R V O I C E 2

Spring  
2005

2

2004年度 CISMOR

— 神教聖職者交流会議をふりかえって  
バーバラ・B・ジクムンド

3

2004年度 CISMOR

— 神教聖職者交流会議

4-11

特集 **カイロ**

ラマダン月の情景

小林春夫

カイロからの手紙

ファトハー・マラーク

エジプトにおける

ユダヤ人コミュニティの栄枯盛衰

ドロン・B・コヘン

エジプトを離れなければならないとは

夢にも思わなかった

モーリス・シクナズィー

フォトギャラリー

12-13

CISMOR夏期研修プログラム報告

イスラエル研修プログラム

マレーシア異文化理解・語学研修プログラム

アメリカ宗教研修プログラム

14-15

スタッフ紹介

16-17

研究会報告

18-19

CISMORインフォメーション



C I S M O R

Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

北米のユダヤ教、イスラーム、キリスト教の指導者たちが集まった今回の一神教聖職者交流会議は私にとってたいへん興味深いものであった。多くの発表や洞察に満ちたコメントを聞いて、私は米国における宗教信仰とその実践を特徴づける3つの事柄に改めて気づかされた。第1は、憲法修正第1条によって保障されている「信教の自由」という考えに対する宗教指導者たちの関わり合いが深く、ゆるぎないものであるということ。この自由はけっして当然のこととして決めつけられてはいないが、強く擁護されている。第2番目は、宗教指導者たちが寛容で、多様性を受け入れつつも、彼らの宗教による「真理の主張」が真剣に取り上げられるのを望んでいることである。彼らは、すべての宗教が同じであるとは考えていない。それぞれの宗教における特徴的な思想や活動が認められ、社会に強い影響を与えることを望んでいる。そして3番目には、個人の宗教的信念が必ずしも所属する宗教と対応するとは限らないということである。それは個人において形作られるものであり、所属する宗教によって制限されるようなものではない。

現在の私があるのは私の家族や教育のおかげである。しかし私は家族や宗教共同体の意見にいつも賛成するわけではない。つまり、個人の信念や信仰習慣は、異なる宗教間ではもちろんのこと、同じ教派や宗教共同体の中でさえ多様なのである。

私は、以下の2つのことから、この一神教聖職者交流会議がこれから大きな影響を及ぼすことになるだろうと思っている。第1に、米国の宗教的多様性についての日本人研究者の理解を深めることができたこと。そして第2に、北米から招いた宗教指導者たちの多くが親睦と率直な対話を通して、互いに持っていた根拠のない固定観念を乗り越えたということである。私はCISMORがこれからも、世界の他の地域の宗教指導者たちと共に、そして彼らのためにも、このような会議を継続して開催することを望んでいる。



2004年度  
CISMOR 一神教聖職者交流会議副議長  
同志社大学大学院アメリカ研究科教授  
パーバラ・ブラウン・ジクムンド

2004年度 CISMOR 一神教聖職者交流会議

「現代アメリカのユダヤ教・キリスト教・イスラームが直面する諸問題」

日時:2004年11月13 - 14日

会場:同志社大学 寒梅館ハーディーホール 京都全日空ホテル 醍醐の間

11月13日(土)

セッションA

公開シンポジウム「多元的国家において“ 真実の宗教 ”についてどのように語るか？」

小原克博(同志社大学大学院神学研究科) 「逆光の被写体 日本社会における一神教のイメージ」

ミラ・ワッサーマン( ベツ・シャローム・ユダヤ共同体 ) 「選ばれし者の選択 米国ユダヤ人にとっての自由の挑戦」

クラーク・ローベンシュティン( メロポリタン宗教対話協議会 ) 「宗教間対話への要請」

マハ・エルジェナイディー( イスラーム・ネットワークグループ ) 「米国の公的領域でイスラームを語る」

セッションB

「アメリカの社会、公共政策は宗教にいかなる問題を引き起こしているか？」

ジョン・ボレリー( ジョージタウン大学 ) 「カトリック教徒について」

マハ・エルジェナイディー 「ムスリムについて」

今井亮徳( パークレー東本願寺 ) 「仏教徒について」

ヒレール・レヴィン( ボストン大学 ) 「ユダヤ教徒について」

クラーク・ローベンシュティン 「宗教的多様性の国における改宗と転向」

イブラーヒーム・A・レイミー( 和解の共同体 ) 「アフリカ系アメリカ人の経験におけるイスラームの歴史的側面」

ロン・サイダー( 社会行動を求める福音派・イースタン神学校 ) 「福音派にとって米国社会の問題点」

ミラ・ワッサーマン 「政教分離」

11月14日(日)

セッションC

「アメリカと中東の関係は宗教と諸宗教関係にいかなる影響を与えているか？」

ロン・サイダー 「政治・政府へのアメリカ福音派のアプローチ」

ヒレール・レヴィン 「『選ばれた人々』と人々を『選ぶ』こと アメリカにおけるユダヤ人の一神教多元主義とその表明」

モスタファ・レズラーズィー( 前アルジャズィーラ東京オフィス ) 「政治と信仰はどのように影響しあうか」

セッションD

「宗教伝統・儀礼は現在のアメリカ社会にいかに積極的に貢献することができるか？」

ジョン・ボレリー 「アメリカにおけるカトリック教徒と公共政策、大統領選挙」

イブラーヒーム・A・レイミー 「アメリカの社会問題に積極的に応対するイスラームの信仰と実践」

今井亮徳 「仏教はどのようにアメリカの一神教的環境に関係していくのか？」



# カイロ



撮影：小原克博



作製：大西果奈  
(同志社女子大学学芸学部情報メディア学科)

エジプト・アラブ共和国の首都であるカイロは、人口1400万人を抱えるアフリカ最大の都市であり、中東・アフリカの経済的・文化的中心地である。住民の約9割はムスリムだが、コプト教会に属するキリスト教徒も居住している。聖マルコ以来の古い伝統を持つコプト教会も存在し、中でも旧市街のマール・ギルギス(聖ジョージ)教会は、エジプトに逃れてきた聖家族(幼子イエスとヨセフ、マリア)がかくまわれたという地下室の上に建つ由緒ある教会である。

アラビア語でカイロは「アル=カーヒラ」とよばれる。これは、10世紀にファティマ朝のカリフ・ムイッズ・ディーンアッラーが名づけた「ミスル・アル=カーヒラ(勝利の町)」に由来する。

ファティマ朝は、モスク付属の教育機関としてアル=アズハル(現在のアズハル大学)を設立した。これは、1171年にアイユーブ朝のサラフ・アル=ディーン(サラディン)がファティマ朝を倒して以来スンナ派に変わり、1258年モンゴル軍によってアッバース朝の首都バグダードが征服されてからは、スンナ派イスラーム学の中心となった。今日も世界各地から多くの留学生を集めている。カイロはスンナ派イスラーム学の中心地と言われるが、それはアズハル大学の存在によっている。

アズハル大学がイスラーム学の中心であるなら、アズハル通りを挟んで同大学に向かい合うフサイン・モスクはカイロの信仰の中心である。フサイン・モスクは預言者ムハンマドの孫のフサインの首が安置されていると伝えられ、普段から善男善女で賑わうが、特にフサインの命日にはエジプト全土からの参詣客でモスクの構内は立錫の余地も無くなるほどである。

カイロの歴史はダイナミズムに富んでいる。ナイル川流域の肥沃な土地と都をめぐって、様々な民族、英雄が交代した。十字軍以後カイロは属州的位置から独立を回復し、さらにイスラーム世界の中心となった。

近代ヨーロッパの進出以後も、主に欧

米化したインテリ層による世俗主義、「民主化」運動、そしてイスラーム主義など様々な立場の人々が活動するダイナミックな都市である。

## <ヨーロッパの進出>

1798年、ナポレオン・ボナパルトが率いるフランス軍がマムルーク軍を破り、エジプトを征服する。1801年には英国も干渉を開始し、フランスはエジプト統治から撤退する。

対フランス攻防戦に功績のあったアルバニア人部隊の隊長ムハンマド・アリーは、1805年エジプト総督に推挙され事実上の委任統治を始め、ナイル川デルタの灌漑、土地・税制改革、軍の整備などエジプトの近代化政策に着手した。

このムハンマド・アリー朝は、英国の保護下において1914年オスマン帝国からの独立を宣言するが、その後国内で激しい反英運動が起こり、1922年フアード1世の時、英国からの形式的な独立を宣言する。

1952年には自由将校団によるクーデター革命が起こり、王制が廃止された。その後自由将校団は、第一次中東戦争の英雄ムハンマド・ナギーブ將軍を指導者に迎え革命指導評議会を結成するが、1954年自由将校団のリーダーであったガマル・ナーセルが大統領に就任し政権を握った。ナーセル大統領は1956年にスエズ運河の国有化に成功、1958年にシリアとアラブ連合共和国を結成して汎アラブ主義を唱え、さらにロシアとの関係も深め、国民の圧倒的な人気を背景に、世俗的なエジプト・アラブ・ナショナリズムを推進した。しかし1967年に第三次中東戦争で敗れて失意のうちに死亡し、アンワール・サーダートが大統領に就任する。

## <イスラーム復興運動の現れ>

ナーセル大統領治下では、イスラーム主義者に対する弾圧が行われ、多くのイスラーム主義運動組織が地下活動にはいり、より過激な「ジャマア・ムスリミン(タクフィール・ワル・フジュラ)」、「ジハード団」などが生まれた。

「ジハード団」は武力闘争によるイスラーム国家樹立を目指す組織である。ピン・ラーディンを中心とするアル=カーイダ・ネットワークの副官アイマン・ザワーヒリーは「ジハード団」の元指導者であり、「ジハード団」もエジプトを越えて世界のイスラーム主義武装闘争派に人材と理論を提供している。

これに対しイスラーム主義運動組織最古参の「ムスリム同胞団」は、イスラーム改革主義を標榜する社会団体である。エジプトでは現在非合法化されているが、大学の学生自治会や職能組合などに浸透し、大きな影響力を有しており、世界各地に支部を有するアラブ世界最大のイスラーム団体である。

サーダート大統領は始め、ナーセル主義者に対抗する政治勢力としてイスラーム同胞団と融和しこれを利用する政策を取ったが、1978年キャンプ・デーヴィッド合意後、関係が悪化した。そして1981年、「ジハード団」と「イスラーム集団」の合作の「ジハード連合」によって暗殺される。サーダート大統領の後を継いだムバラク大統領は、相対的に「穏健」な「ムスリム同胞団」を体制に協力的なアズハル武装闘争派を「過激派」とする政策を採り現在に至っている。



カイロ フサイン・モスク

写真提供：(財)島根県並河萬里写真財団

# カイロ： ラマダン月の 情景

小林春夫  
東京学芸大学教授。  
専門はイスラーム  
思想史。現在は日  
本学術振興会カイ  
ロ研究連絡センタ  
ー長。



カイロと聞いてすぐに思いつく言葉は何であろうか。郊外のギザにあるクフ王のピラミッドか、それとも数千年の時を経て悠然と流れるナイルの流れだろうか。私はほぼ8年ぶりでカイロを再訪しこの滞在も半年を越えたが、依然としてこの街を表現する適当な言葉を持たないでいる。

暑い夏も終わり（といってもこの季節に明確な境目はないのだが）、やや涼しい風が吹き始めたと思つたころにラマダン月（10月15日）がやってきた。

ラマダン月とは言うまでもなくヒジュラ暦の9月で、昨年はその1425年目に当たっていた。この月はカイロっ子を

めすべてのムスリムにとって一年で最大の行事である断食が行われるのである。エジプトはその人口の9割をムスリムが占め、残りの1割をコプト系のキリスト教徒が占める国である。歴史的には641年にムスリム軍がこの街を占領して以来、イスラーム世界の中心地のひとつとして繁栄してきた。とりわけ世界最古の大学とも言われるアズハル学院（現アズハル大学）が10世紀末に建てられてこのかた、カイロは世界のイスラーム学の中心と自らを位置づけている。

そのラマダン月が近づくとつれ、新聞にはラマダン特集が組まれ、テレビやラジオでも特別番組の予告がだされるようになる。またスーパーや商店の軒先には、この月の食卓を飾る食材の数々が山のように積まれる。奇妙に聞こえるかもしれないが、エジプトではラマダン月に食料や水道・光熱の消費量が増え、政府もそれを見越して特別の増産体制を指示する。これは一つに、イスラームの断食は日の出から日没までの断食であって、その後は自由に飲み食いすることが許されているからだが、また断食後（5時過ぎ）に摂る食事イフタールは親戚や友人などを招いて一緒にご馳走を食べる慣わしがあるからである。こうして人々は今日一日の断食の達成を祝うとともに、日々の糧を与え給う神に感謝し、飢えや渇きに苦

しむ貧しい同胞の身の上を思いやるのである。

そもそも平等や相互扶助の精神はイスラームの教えの根幹をなすものであるが、特にラマダン月にはすべてのムスリムが同じ時刻に食を共にすることによってこの精神が強化されるように思われる。たとえば私のアパートの近所では商店やガソリンスタンドの店員が屋外のテーブルを囲んで食事をする光景をよく見るし、また貧しい人々や仕事の都合で家に戻れない人々のために「慈者の食卓」とよばれる無料の飲食施設が街のそこここに設けられる。そして皆一様に食べて満足し、たとえ施しを受けたとしても、その負い目など微塵も感じさせないで立ち去っていく。

ラマダンはまた子供たちにとっても楽しみ月の月である。道筋には色紙を切り抜いた飾りが張り巡らされ、家の軒先にはラマダン・ランプ（写真参照）が燈される。おいしいお菓子やご馳走を食べ、夜更かしも少しは大目にもてもらえるし、日本のお年玉にあたる特別なお小遣いももらえる。だが何よりも、始めて断食を経験する子供たちにとっては、一人前のムスリムとして立派に義務を果たしているという誇らしい気持ちが一番だろう。

こうして書き連ねていくと切りがないが、この時期カイロの街を歩いているといたるところでイスラームの美点を目にすることができる。もちろん現実には、ラマダン月に入る直前にシナイ半島のリゾート地で大規模な爆弾テロがあったし、イラクやパレスチナでも日々数多くのムスリム同胞が犠牲になっている。またエジプトそのものの政治や経済の状況も決して安泰とは言えないであろう。だがこうした騒擾の中でも、人々はラマダン月を通して自らの信仰を再確認し、また大いに楽しんでいるように思われる。

同じくズワイラ門外に立ち並ぶラマダン・ランプ屋。クルアーンの文句や伝統的な図柄を描いた様々なランプが陳列されている。（筆者撮影）

# カイロからの 手紙

ファトハー・マラーク

日本にいる友人へ  
私の話が役に立つのかどうか分かりませんが、私たちカイロに住むコプト（キリスト教徒）の生活がどんなものか知りたいというので、筆をとりました。

あなたもご存じのように、私はナイル川河口近くのバニー・スーヴィーフ地区で生まれました。私たちは9人の家族で、中流の家庭でした。でも、アッラー（神様）のおかげで、私たち兄弟姉妹は全員、教育を受けることができました。私も、私の兄も教師になりました。

さて、私の子供の頃の話からしましょうか。私の通っていた小学校は規模が小さく、男子と女子と一緒に学んでいました。近くから通って来る生徒もいれば、遠くからの生徒もいました。また、ムスリムの子供も、コプト（あなたが「ナサリー」とか、冗談で「アズマーザルカー（青い骨）」と呼んでいるような人たちのことです）の子供も一緒に勉強していました。私たちが一緒に遊んでいる時など、

キリスト教徒とムスリムとの違いを気にしたことはありませんでした。お互いのお祭りの日や断食の期間でも違いを意識しませんでした。お互いにお菓子なんかを贈りあったりもしましたから。

高校卒業後、大学へ進学するために私はカイロに行きました。そこには、エジプト各地からやって来たコプトたちがいました。最初のうちはなかなか慣れませんでした。こちらの教会へも行くようになり。時々日曜学校をさぼったりもしましたが、大学の試験の時には情報交換をすることもあって、友達と一緒に必ず行ったものでした。カイロのショブラー地区やラムシース地区などにあった教会から招待を受けたこともあり。ときどき、私は、そこで行われる良い説教があったときに行くこともありました。

カイロで私は家族から離れて一人でしたが、あなたも知っているように、われわれの故郷からピラルトゥニーがカイロの新市街に住んでいました。そして私は、時々彼女に会っていました。

そして、私たちは大学卒業後に結婚することを決めていました。彼女の兄は、大変厳しい人でしたが、彼女の友達は私たちの結婚を応援してくれて、時々私たちを食事に招待してくれたりもしました。私たちは、教会に行き説教を聞いたり、

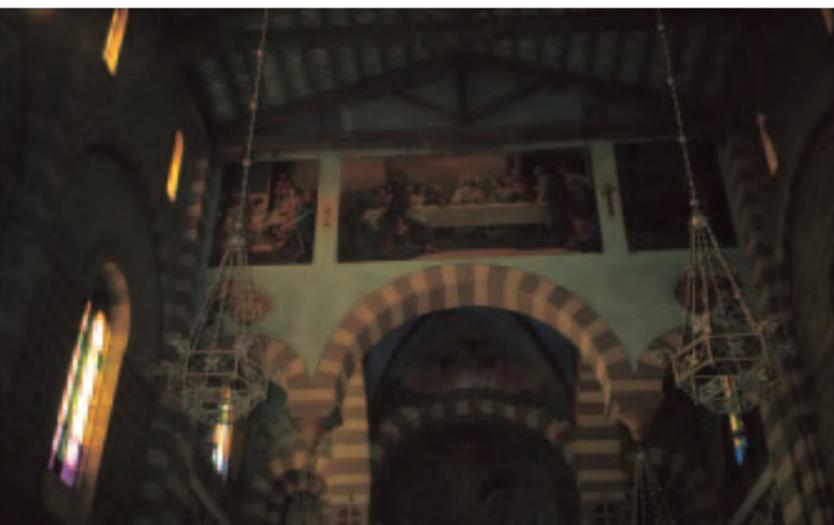
遊んだりしていました。彼女は、私も教会に行くことに熱心でした。というのも、ショブラー地区に住んでいた彼女の親戚がいつも、教会に出席することを彼女に熱心に勧めていたからです。

大学を卒業して、兵役に就きました。私は幸運なことに士官になることができ、10人の部下を持ちました。この兵士たちの中には、大きなモスクのシャイフの息子もいて、私を自宅に招いてくれたりしたものでした。1973年戦争が終わった後、兵役期間が終わりました。その後、私はピラルトゥニーと結婚し、カイロで教育に携わるようになりました。そして、彼女も学校での仕事をするようになりました。私たちは、3人の子供たちを育てて、私立の学校教育を受けさせました。妻は、学費のない公立学校に行かせたかったようすけれど、政情が少し不安定で、教会においてモイスラーム主義者の集団に気をつけるようにと言うほどでしたから、私立学校に行かせました。もちろん、そんな人は遠くから来ていた少数の人々で、私たちのムスリムの友達はとてもよい隣人であったことは言うまでもありません。

私は現在、スーヴィーフに住んでいます。私は年を取り、子供たちは大きくなりました。ここでの暮らしはずっと静かです。そして私は、カイロでの生活も、10年前よりもずっと良くなっていると思います。

この国のキリスト教徒の数は決して多くありませんが、政府でも要職についている人もいます。これは本当にすばらしいことです。そして私たちキリスト教徒は、エジプトとアラブの全ての国々と世界中の人々の間に平和が広がることを熱心に祈っています。

私の手紙は少しでも役に立つでしょうか。今、私は年金生活を送っていますが、時々、私立学校で教えています。幸せな毎日です。神様があなたをいつも守ってくれるようにと、祈っています。そして、あなたが私たちのことを覚えていてくれたことに感謝します。今では、私の子供たちが私のためにE-mailを送ってくれます。私はコンピューターには弱いので、それではさようなら。



コプト教会(アレキサンドリア市内)  
エジプトに住む単性論派のキリスト教徒が所属する教会。「コプト」とは、ギリシャ語のアエギュプトス(「エジプト」の意味)から来ている。452年のカルケドン公会議で異端宣告され、その後ローマ帝国の正統派から分離、独立することになった。イスラームの征服以降、信徒数は徐々に減少し、現在のエジプト人口に占める割合は約6%となっている。信徒は日常ではアラビア語を用いるものの、典礼などではコプト語を使用する。

## エジプトにおけるユダヤ人コミュニティの栄枯盛衰

ドロン・B・コヘン  
同志社大学神学部嘱託講師

聖書によれば、ヘブライ人は族長の時代にエジプトに来て、数世代の間、そこで奴隷であった。出エジプトの後、イスラエルの12部族はひとつの民となり、イスラエルの地に定住した。

ユダヤ人は数世紀たって初めてエジプトに戻った。紀元前5世紀にはユダヤ人軍事植民地が南エジプトのイェブ（エレファンティネ）

## エジプトを離れなければならぬとは夢にも思わなかった

かつてエジプトに住んでいたユダヤ人とのインタビュー

モーリス・シックナズィー氏

（エジプト生まれ、現在、シカゴ在住）

私は現在、シカゴにあるバイオ・エンジニアリングの会社に働くアメリカ人技術者であるが、普通とは異なる経歴を持っている。米国の市民であるが、先祖はイタリアの出身で、フランス式の教育を受け、宗教はユダヤ教。エジプトで生まれたのでアラビア語が流暢である。

私の祖父母は、新しい機会と、多分より暖かな気候も求めて、19世紀にイタリアのリボルノからカイロに移住した。私の父はフランスで教育を受けた口腔外科医と歯科医であり、カイロで個人診療所を持っていた。私たちはカイロのサカキニ地区に住んでいた。私は1951年にカイロで生まれ、2人の兄と2人の

の町にあった。アレキサンドロス大王による征服の後、エジプトでのユダヤ人の定住はかなり増加した。プトレマイオス朝時代（紀元前322年 - 紀元30年）とアンティオコス4世エピファネスによる迫害の時代に多くの避難民がエジプトにやって来た。

紀元1世紀、100万人のユダヤ人がエジプトに住んでいたと見積もられる。その期間に、ユダヤ人はヘレニズム文化を受け入れ、聖書は初めてギリシア語に翻訳された（セプトゥアギンタ [ギリシア語訳旧約聖書]）。すぐれた文化人の中にはアレキサンドリアのフィロン（紀元前20年 - 紀元40年）がいた。しかしながら、地元のギリシア人が抱いていた反ユダヤ的感情は民衆の不安を引き起こし、それはついに紀元115年のユダヤ人の反乱となり、その際、ユダヤ人の共同体はほとんど破壊された。

ムスリムが624年にエジプトを占領したとき、ごくわずかなユダヤ人だけが残っていたが、その数は再び増え始めた。ユダヤ人は劣等市民とみなされ、特別な服を着ることを義務づ

けられたが、彼らはユダヤの文化生活を維持した。

969年、ファーティマ朝の支配者たちがエジプトを征服した。彼らの寛容な支配の下（969 - 1171年）、政府における大臣の地位にあったユダヤ人もいた。12世紀には2万5千人のユダヤ人がエジプトに住み、その大部分はフスタート（カイロ）にいて、彼らの言葉はアラビア語であった。ユダヤ人は医学の分野ですぐれ、支配者の宮廷で仕えた。また手工業、特に染色、それに革なめしや国際貿易に従事した。スペイン生まれの偉大なユダヤ人哲学者モーゼス・マイモニデス（1135 - 1204年）は1165年にエジプトに来て、スルタンの首席医師として仕えた。

1117年、エジプトはアイユーブ朝によって占領され、比較的寛容な期間がもたらされたが、1250年にマムルーク朝人がエジプトを占領し、宗教的熱狂主義が強まった。1301年から差別法が拡大され、ユダヤ人共同体は衰え、15世紀の終わりにはエジプトに残るユダヤ人は500人を切った。

1942年にスペインから追い出されたユダヤ人の一部がエジプトに到着した。オスマン帝国の占領（1517年）後、ユダヤ人共同体は大きくなった。ユダヤ人はヨーロッパとの海上貿易に積極的であった。スペインからのユダヤ人亡命者たちの定住はユダヤ人の宗教的・精神的覚醒を引き起こしたが、17 - 18世紀、なお続くオスマントルコ人による支配の下、ユダヤ人共同体は再び衰退した。

1492年にスペインから追い出されたユダヤ人の一部がエジプトに到着した。オスマン帝国の占領（1517年）後、ユダヤ人共同体は大きくなった。ユダヤ人はヨーロッパとの海上貿易に積極的であった。スペインからのユダヤ人亡命者たちの定住はユダヤ人の宗教的・精神的覚醒を引き起こしたが、17 - 18世紀、なお続くオスマントルコ人による支配の下、ユダヤ人共同体は再び衰退した。

1956年の戦争の後、私の友人である外国人の多くは国を離れた。彼らの多くは、「敵を援助した」という口実の下、財産を没収された。外国人とユダヤ人は本当におびえ、ずっと目立たない態度をとったが、私たちは通常的生活を再び始めた。

1967年の戦争の間の状況ははるかにひどかった。私の父、私の2人の兄、私の義兄弟と彼の2人の兄弟、それに私のおじは拘留された。私たちは現行のイタリアのパスポートを持っていたので、戦争が終結し（1967年6月）2週間以内に、私の父、2人の兄弟、私のおじは、イタリアに追放された。私の義兄弟と彼の2人の兄弟は、国を離れることを許されるまで

1492年にスペインから追い出されたユダヤ人の一部がエジプトに到着した。オスマン帝国の占領（1517年）後、ユダヤ人共同体は大きくなった。ユダヤ人はヨーロッパとの海上貿易に積極的であった。スペインからのユダヤ人亡命者たちの定住はユダヤ人の宗教的・精神的覚醒を引き起こしたが、17 - 18世紀、なお続くオスマントルコ人による支配の下、ユダヤ人共同体は再び衰退した。

エジプトの近代はムハンマド・アリーの即位で始まった（1805年）。19世紀、エジプトのユダヤ人共同体はもう一度元気を取り戻した。ヨーロッパのユダヤ人共同体との関係が築かれ、初めて近代的な学校が開かれた。フランス語が上流階級の話し言葉となった。

英国による占領下で、ユダヤ人の地位は改善した。1898年、エジプトのユダヤ人共同体は2万5千人を数えた。ユダヤ人は公共の行事に参加し始めた。ユダヤ人慈善家の一族は共同体の中に学校、病院、養育院を開設した。経済的繁栄が工業、銀行、商業で成功し、社会生活や政界で重要な地位を手に入れた多く

1942年にスペインから追い出されたユダヤ人の一部がエジプトに到着した。オスマン帝国の占領（1517年）後、ユダヤ人共同体は大きくなった。ユダヤ人はヨーロッパとの海上貿易に積極的であった。スペインからのユダヤ人亡命者たちの定住はユダヤ人の宗教的・精神的覚醒を引き起こしたが、17 - 18世紀、なお続くオスマントルコ人による支配の下、ユダヤ人共同体は再び衰退した。

1年以上もの禁固に耐えた。彼らは英国出身であったにもかかわらず、その時「不明市民」であった。私の母、2番目の姉、それに私は、1968年5月8日にアレキサンドリア経由でエジプトを離れた。上の姉は彼女の夫の解放を待って、数月後に去った。

カイロでのその前年は、私たちには収入源がなかったので、たいへん混乱していた。私たちはとても困り果て、持っている物はなんでも売った。人々はとても礼儀正しかったが、よそよそしかった。私たちは結局、イタリアへ出発することを決めた。後に私は自分自身で米国へと移った。

私たちにとって、エジプトを離れることは予期せぬことであり、深く傷ついた。私の両親は、エジプトを離れることをまったく夢にも思わなかった。彼らはアレキサンドリア近くのアブー・キールにある避暑用の別荘で隠居することを夢見ていた。私たちはガマール・ナーセル政権の大臣たちと彼らの家族と友人であったが、けっして政治に関わることはなかった。私たちは、政府がエジプトにいる16歳以上のユダヤ人男性すべてを拘留するのを見てたいへん驚いた。その時私は15歳であった。一家の稼ぎ手がいなくなり、私たちは国を離れなければならなかった。

私の家族でエジプトに留まった者はいなか

のユダヤ人をさらに富裕にした。1937年、ユダヤ人共同体の人口はピークに達し63,500人となり、その大部分はカイロとアレキサンドリアに住んでいた。それは、地中海沿岸の多くの国々からの出身で、多くの言語を話すたいへん多様な共同体であった。しかし、ユダヤ人はエジプトの市民権を与えられず、彼らは出身国の国籍を持ち続けなければならなかった。エジプトで生まれたユダヤ人もまた彼らの両親の国籍を持たなければならなかったが、あるいは国籍がない状態であった。

パレスチナでのアラブの反乱（1936 - 1939年）はエジプトにおけるユダヤ人の状況の悪化とそれ以後続く嫌がらせの始まりであった。1945年にはユダヤ人に対するデモが行われ、ユダヤ人の店や会堂が略奪された。国連によるパラスチナ分割決議（1947年秋）後、エジプトのユダヤ人は当局の人質となり、彼らの財産は没収され、多くの者が逮捕された。ユダヤ人のほぼ半分がイスラエルに移住し、1957年までに残ったユダヤ人は約1万5千人だけだった。シナイ半島での軍事行動（1956年）の

後、ますます多くの者がイスラエルに逃れた。1967年、六日間戦争の後、新たな迫害の波が起こり、大部分のユダヤ人男性は拘禁され、それから国外へと追放され、約2千5百人のユダヤ人だけがエジプトに残った。ほんの数家族だけが1970年まで残っていた。

1979年のエジプトとイスラエルの和平協定の後、ユダヤ人共同体の権利が回復され、小さな共同体が再びカイロで組織された。そこには実際に使われている会堂シャルル・ハシヤマイムがあり、イスラエルの外交部の職員によって管理されている。

後、ますます多くの者がイスラエルに逃れた。1967年、六日間戦争の後、新たな迫害の波が起こり、大部分のユダヤ人男性は拘禁され、それから国外へと追放され、約2千5百人のユダヤ人だけがエジプトに残った。ほんの数家族だけが1970年まで残っていた。

1979年のエジプトとイスラエルの和平協定の後、ユダヤ人共同体の権利が回復され、小さな共同体が再びカイロで組織された。そこには実際に使われている会堂シャルル・ハシヤマイムがあり、イスラエルの外交部の職員によって管理されている。

1942年にスペインから追い出されたユダヤ人の一部がエジプトに到着した。オスマン帝国の占領（1517年）後、ユダヤ人共同体は大きくなった。ユダヤ人はヨーロッパとの海上貿易に積極的であった。スペインからのユダヤ人亡命者たちの定住はユダヤ人の宗教的・精神的覚醒を引き起こしたが、17 - 18世紀、なお続くオスマントルコ人による支配の下、ユダヤ人共同体は再び衰退した。

1956年の戦争の後、私の友人である外国人の多くは国を離れた。彼らの多くは、「敵を援助した」という口実の下、財産を没収された。外国人とユダヤ人は本当におびえ、ずっと目立たない態度をとったが、私たちは通常的生活を再び始めた。

1967年の戦争の間の状況ははるかにひどかった。私の父、私の2人の兄、私の義兄弟と彼の2人の兄弟、それに私のおじは拘留された。私たちは現行のイタリアのパスポートを持っていたので、戦争が終結し（1967年6月）2週間以内に、私の父、2人の兄弟、私のおじは、イタリアに追放された。私の義兄弟と彼の2人の兄弟は、国を離れることを許されるまで



エズラ・シナゴーク(カイロ市内)



バル・ミツヴァー (男の子が13歳になった時の儀式)

シナゴーク内部 (カイロ市内)

写真提供：Jewish Community Council in Cairo (JCC)



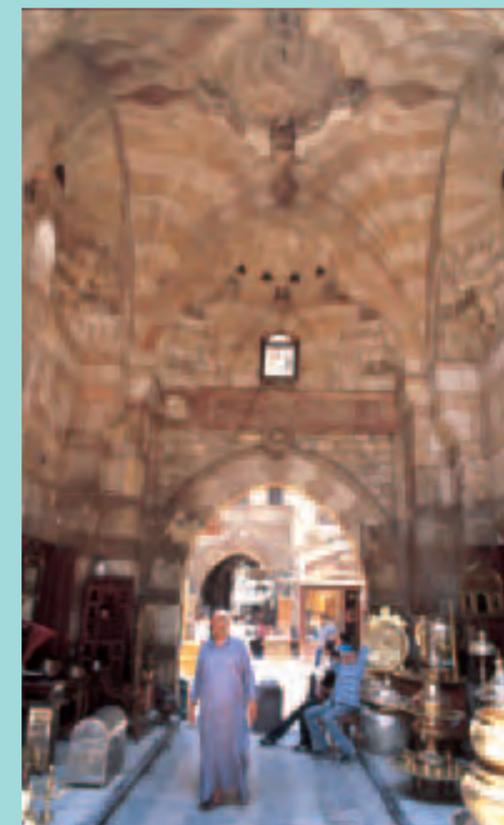
ピラミッド

写真提供: 在日エジプト大使館



カイロ旧市街

写真提供: 在日エジプト大使館



カイロ旧市街

写真提供: 在日エジプト大使館



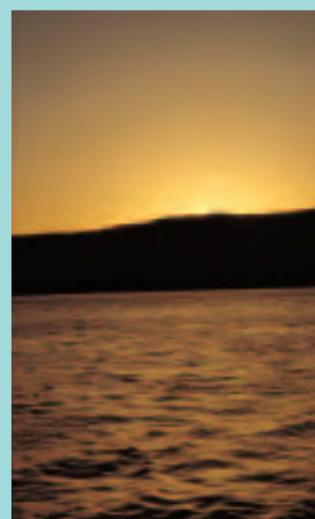
ピラミッド付近

写真提供: 在日エジプト大使館



カイロ郊外

写真提供: (財)島根県並河萬里写真財団



ナイル川の夕日

撮影: 小原克博



カイロ新市街

写真提供: 在日エジプト大使館

# イスラエル 研修プログラム (8月18-28日)

小原克博  
同志社大学大学院神学研究科教授、  
CISMOR幹事

森 孝一、越後屋 朗、アダ・コヘン（以上、同志社大学大学院神学研究科）、三浦伸夫（神戸大学大学院総合人間科学研究科、同志社大学客員フェロー）の各氏と共にイスラエル研修プログラムに参加した。イスラエルにある大学・研究施設との交流や、イスラエルの現地視察を目的とし、以下のようなプログラムが実施された。

8月18日：エルサレム旧市街地の視察。

8月19日：シェヒター・ユダヤ学研究所でのセミナー「現代世界における宗教の指導性」に参加。イスラエル博物館・死海写本館の訪問。

8月20日：エルサレム近郊の分離壁視察。ヤド・ハシュモナ、アブ・ゴッシュなど、ユダヤ教徒・キリスト教徒・ムスリムが共存している地域の視察。

8月21日：死海周辺地域の視察。

8月22日：ヘブライ大学でのセミナーに参加。ヤッフオの視察。

8月23日：ヤド・ヴァシエム（ホロコースト博物館）訪問。チクロン・ヤコブで、オープン・ユニバーシティ主催のセミナー「宗教・アイデンティティ・宗教間対話」に参加。  
8月24日：ハイファ、ナザレ、ガリラヤ湖、カペナウムの視察。

以上の体験の中には、人々との刺激的な出会い、聖書の歴史を彷彿とさせる事物や風景との邂逅、また、現在のイスラエル・パレスチナ問題の生々しさ・複雑さとの対面などが



ユダヤ教の聖地「嘆きの壁」(筆者撮影)

多数織り込まれているが、ここでは以下の3点に絞って紹介してみたい。

## (1) 嘆きの壁

エルサレムの旧市街を取り囲む城壁には8つの門がある。その一つ、Dung Gateをくぐると嘆きの壁が見える。ただし、そこに近づくためには厳しい検問を通過する必要がある。セキュリティ・チェックは、暴動などがあってから強化されたようである。ちなみに、15年前、わたしが初めてエルサレムを訪れた際には、こうした検問はまったくなかったのが、時代の変化、状況の変化を感じさせられた。

嘆きの壁の前をよく見ると、三つのセクションに分かれているのがわかる。一番奥が男性用の場所、手前が女性用の場所、中央が、そのどちらにも行きたくない人の場所である。中央は、主として、男性・女性の区別をすることを快く思わない改革派のユダヤ教徒(Reformed Jew)のセクションになっている。イスラエルで公認されているのは正統派のユダヤ教徒(Orthodox Jew)だけであり、アメリカで比較的多い改革派のユダヤ教徒が肩身の狭い思いをしているのは意外な感じがした。

## (2) 分離壁

イスラエル国内で分離壁の問題に関わっているグループはいくつかあるが、その一つ「人権を求めるユダヤ教聖職者たち」のメンバーに案内をもらった。最初、地図を広げ、従来の境界線と分離壁の位置関係について説明を受けた。イスラエルの領土は短期間の内に数回変わっているのが、建国以来の歴史、特に中東戦争やインティファダのことを知らなければ、境界の変化にどのような原因があったのかを理解することはできないだろう。ともかく、分離壁の建設予定距離730キロのうち、145キロがすでに完成している。

今回は2カ所の分離壁を訪ねた。いずれの場所も、もともと一体となっていたコミュニティが不自然な形で分断されてしまう点に人道上的問題があるとの説明を受けた。たとえば、

分離壁ができることによって、かつて身近にあった病院に行くことすらできなくなる。急患の場合など、この問題は深刻だ。

ハーグ国際裁判所が分離壁の建設の違法性をすでに指摘しており、国際社会からも繰り返し分離壁建設に対する批判が出てきているので、わたしは「人権を求めるユダヤ教聖職者たち」も建設反対であると思こんでいた。しかし話を聞いてみると、必ずしも反対ではないのだ。自爆テロなどの危機から子どもたちを守るためには分離壁は必要だという。分離壁建設後、自爆テロの件数が10分の1に減ったというのだから、その効果を完全に無視することはできないようだ。つまり、分離壁の必要性を容認しながらも、パレスチナ人たちの生活を分断しないように建設位置の変更を人権団体は求めているのである。こうした状況の細部は、日本にはまだ十分に伝えられていないように思う。

## (3) 学術交流

イスラエルにおける研究者たちと交流する機会を数度持ったが、中でも、ヘブライ大学でのいくつかのレクチャーは圧巻であった。たとえば、ユダヤ教の世界的権威ラッヘル・エリオ教授は、ユダヤ教のエッセンスを力強くストレートに語り、しばし恍惚状態に陥るほどの知的興奮を得ることができた。ユダヤ的知性の高みに触れたと言っても過言ではない。ヘブライ大学における日本学専攻の学生は500名にも及び、日本研究はアジア研究の中でも特に人気が高いという。今回の研修の成果から、日本とイスラエル双方にとって有益な教育研究基盤を作り出していくために、このほど、同志社大学神学部・一神教学際研究センターとヘブライ大学人文学部との間で学術交流協定が締結された。



パレスチナ人居住区を分断する分離壁(筆者撮影)

# マレーシア 異文化理解・ 語学研修 プログラム (8月15-30日)

石橋誠一  
同志社大学大学院神学研究科博士前期課程



ホームステイ先での記念写真

# アメリカ 宗教研修 プログラム (9月4-13日)

若林 裕  
同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

アメリカ研修は密度の濃いものだった。西のカリフォルニアと東のワシントンDCを歩き来し、米国内での時差も体験できた。東奔西走しながら、訪れた場所、面談した人々の話、得た情報ひとつひとつをノートする。かなりの研究資料となった。

米国の張りつめた空気も実感できた。空港・公共施設での厳しいセキュリティ・チェックがその一面を物語る。滞在中にイラクでの米



メツラー局長とのインタビューの様子

今回の研修の目的は英語とイスラームの基礎知識を学ぶことであった。英語学習には、研究に必要な専門書の読解力を向上させるプログラム、そして国際学会や会議で発表をすることも念頭においた会話もカリキュラムに組み込まれていた。

イスラームについても、大学での講義だけでなく実際にムスリムの人々の生活を肌で感じることができたのは大きな収穫であった。日本ではムスリムは圧倒的少数である。礼拝など制約の多さに窮屈な生き方を強いられている印象を持っていたが、ムスリムが多数の世界では、彼らは不自由なく暮らしていることが見てとれた。異文化理解は実際に経験してみることから始まるのだということを感じた。モスクからは、一日のうちに5回礼拝への呼びかけが流れていた。最初は騒々しく感じられたその声が、日本に帰る日が近づくと、もう聞けなくなってしまうことに寂しさを感じるようになった。

しかし、マレーシアでの経験は今も残って

いる。クアラルンプールには、CISMORの海外研究拠点として「異文化理解・語学研修センター」が設立され、学術的交流が容易になった。次回はマレー語も学んでから訪れたい。

8月15 - 20日(クアラルンプール)

マレーシア国際イスラーム大学において研修。  
21 - 22日(マラッカ)

ムスリム家庭でのホームステイ。

23 - 25日(セランゴール)

アッセンブリー・オブ・ゴッド教会訪問。

マレーシア聖書学院訪問。

27 - 28日

マレーシア市内観光。

29 - 30日 帰国。

軍戦死者が千人を越えたとの新聞報道も見た。この戦時下の米国で、テロを未然に防ぐ目的の法律(愛国法)はプライバシー侵害まで生んでいるようだ。矛先はムスリムの人々に向けられているという。かつての強制収容を記憶する日系人のなかに、この問題に対し真摯に取り組んでいる人々がいることも知った。

訪問地で唯一、和やかさがだけ濃い続けているように感じられたのは、学生街パークレーだった。ここでの滞在時に9月11日がめぐってきた。当日は地元の州立大学でフットボール試合があり、街中は朝から浮き足立っていた。夕刻、研修から戻り、ホテルのロビー全体に広げられた特設スポーツ・バーにたむろする人波をかき分け、部屋へ戻る。テレビをつけると、三年前のテロ犠牲者を記念する特集番組が、厳かに流れている。一様には語りきれない米国の二つの今を、垣間見たように思われた。

身をもって、アメリカの宗教と現在とを経験する意味深い研修だった。

9月4日  
クリスタル・キャセードラル(カリフォルニア州ガーデングローブ)見学。

9月5日  
二つの「メガ・チャーチ」の礼拝に出席。クリスタル・キャセードラル、マリナーズ教会(カリフォルニア州アーヴァイン)、ジーン・モルウェイ牧師にインタビュー。

9月7日  
ワシントン大聖堂(Washington National

Cathedral、ワシントンDC)、ホロコースト博物館見学。

9月8日

アーリントン国立墓地見学。ジョン・C・メツラー局長にインタビュー。

9月10日

「アメリカン・ムスリム・ヴォイス」代表のサミーナ・ファヒーム・サンダス氏にインタビュー。イスラーム・センター(サンフランシスコ)見学。

太平洋神学校(Pacific School of Religion)附属のInstitute for Leadership Development & Study of Pacific and Asian North American Religion(PANA研究所)、神学大学院連合(Graduate Theological Union、カリフォルニア州パークレー)を訪問。

9月11日

パークレー東本願寺を訪問。今井亮徳師にインタビュー。シカモア組合教会(エルセリート)を訪問。日系人キリスト教会の西村 篤牧師と松下道成牧師にインタビュー。

9月12日

グライド・メモリアル合同メソジスト教会日曜礼拝(サンフランシスコ)に出席。ダグラス・フィッチ主任牧師、セシル・ウィリアムズ前主任牧師、ジェニス・ミリキタ二氏(グライド基金理事長)にインタビュー。

9月13日 帰国。



## サミール・ノウフ

私が初めて日本に来たのは1982年、カイロ大学で15年間教えた後でした。当時、私は東京にあるサウジ大学のアラビック・イスラミック・インスティテュートでアラビア語を教えました。新しい社会で、新しい人々、新しい生活と出会いました。そこで私は様々な人々に教えていました。趣味として学ぶ学生や、暇をもてあましていた学生、会社員、ラジオ番組やテレビ番組のアナウンサー、ジャーナリスト、主婦などでした。

当時、私は彼らに私自身の生活に興味を持ってもらうよう努力しました。しかし私が日本の生活、食べ物や娯楽に通じることはありませんでした。人々はエジプトやアラブの生活について非常に興味を持ち、毎週のように私のもとにやってきました。私たちはエジプトの料理を作り、エジプトの映画を見、エジプトの音楽を聴き、アラビア語で話し合いました。

しばらくして、私は日本語を学ぶべきだと思いました。そこで、渋谷の日本語学校や、国際交流基金のクラスに通い、テニスクラブのメンバーになりました。しかし時の流れるのは早いもので、あっという間に4年が過ぎ、日本を離れることとなりました。

リアドのイマム大学で18年間教鞭を取った後、昨年10月に私は再び来日しました。今回は東京ではなく、京都の同志社大学です。最初から何か違うものを感じました。日に日にそれが、私が日本の歴史を匂い、肌で感じることでできる町にいるからだと感じました。散歩をするたびに、歴史を紐解いているような気になりました。私の目に映る人、道、川、山、自然の一つひとつが全く違うようでした。しかし、本当に私の感じるものが表現できて、語ることでできるのでしょうか...

### 著作

*Haji Travels in Japanese Literature*, Makkah: Ministry of Haji Jeddah Saudi Arabia, 2002.

*Bushido and Values of Arabic Islamic Civilization*, Riyadh: King Abdel Aziz Public Library, 2002.

*Islam and Religions in Japan*, Riyadh: King Abdel Aziz Public Library, 2001.

### アラビア語翻訳出版予定

*Tanaka Ipppei, Pioneer of Islamic Studies and His Travels to Arabia* (edited by Takushoku Univ.) Riyadh: King Faisal Foundation, 2005.

## 松永泰行

2004年4月からニューヨーク大学（NYU）で、イランの改革運動についての研究成果の取りまとめに取り組んでいる。こちらの大学施設を利用するのは、1月間の滞在中に9/11事件に遭遇してしまった2001年以来であるが、様々な変化が見られる。

最もありがたいのは、雑誌論文など文献の電子化が格段に進み、大学のサーバー経由でダウンロードできるようになったこと。10年前に大学院留学で来ていたときには、巨大な図書館を徘徊して雑誌を集めて回り、コピー機を多用していたものだが、今や自宅のコンピューターからほぼ何でも、そのままプリントアウトできる。さらに、キャンパス中に無線LANが張り巡らされているので、試したことはないが、ワシントン・スクエア公園のベンチに座っていても、個人のラップトップからすべてのデータベースにアクセスができる。こちらでは、私立大学の学費の高騰が目覚ましいが（NYUも学部生で年間 \$38,000）、その分サービスもすばらしいということらしい。

コピー機は使わなくなったが、図書館自体やはり便利である。所蔵冊数が多いので、大概の本は即日手に入るし、貸出更新も他大学図書館からのローン申し込みも、オンラインで自宅からできるようになっている。



## 村田晃嗣

国際テロ、イラク戦争、ブッシュ第2期政権の発足と、ここしばらくはアメリカ外交から目が離せない。昨年11月、ブッシュ政権の外交エリート群像を描いたジェームズ・マンの *Rise of the Vulcans: The History of Bush War Cabinet* という本を何人かで共訳し、『ウルカヌスの群像 ブッシュ政権とイラク戦争』という表題で出版した。また今年2月には、『アメリカ外交 苦悩と希望』という新書を出版した。

昨年の夏休みには、台北に出かけて、米中関係や中台関係、米台関係について、関係者にインタビューした他、半年ぶりにワシントンを訪れて、シンクタンクを回ってきた。さらに秋には、北東アジアの国際関係をめぐる国際会議で、ベルリンに初めて出かけた。今後も予定が目白押しで、今しばらくは暇になれそうにない。



## 森 孝一

CISMORの研修プログラムとして、去年の8月にイスラエルを、9月には「9・11」3周年のアメリカを、それぞれ10日間訪問しました。二つの国に共通していたものは、人びとが「恐怖心」のなかで生活しているという現実でした。

イスラエルの750キロにもおよぶ「分離壁」も、アメリカの先制攻撃によるイラク戦争も、根底にあるものは本土を戦場とする「テロとの戦争」への恐怖心です。恐怖心と憎悪を乗り越えて、共存と平和を実現するために、CISMORの果たすべき役割の重要性をあらためて感じました。

私の研究領域はアメリカ宗教史です。むしろ、宗教を通してアメリカを研究すると言った方が適切だと思います。「あなたの生活にとって、宗教は重要ですか」という世論調査に、イスラーム9カ国では71%が重要と答えたのに対して、アメリカでは86%が重要だと答えています。アメリカは世界で唯一の超大国でありながら、イスラーム圏以上に宗教的な社会であることは、日本ではあまり認識されていません。今回の大統領選挙においても、宗教や倫理・価値観の問題は重要な争点となりました。世界で最強の一神教国家であるアメリカ。その実像を宗教を通して追求していきたいと願っています。



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会



第1回研究会(2004年6月12日)

場所:同志社大学 今出川キャンパス  
 深水館1階会議室

「一神教が直面している問題について アメリカ合衆国の場合」  
 パーバラ・B・ジクムント(同志社大学大学院アメリカ研究科教授)  
 「イスラームにおける異教徒との共生」  
 中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

2人の発表は、いずれも「宗教間対話」への関心をその根底に持つものであった。ジクムント氏によれば、今日のアメリカにおいて、何れの信仰体系も他の信仰体系と関わらざるを得ない状態にある。その際、一神教的信仰を持つ諸団体は必然的にひとつの問題に直面する。それは、一神教の信仰を保ちつつ、他宗教を否定するようなかつての排他主義を乗り越え、他宗教に対し敬意を持って接しなければならぬという問題である。この「一神教の直面している最大のチャレンジ」の具体例として、ジクムント氏は1999年NCC (the National Council of Churches)から提出された"Marks of Faithfulness"などを紹介した。現代のアメリカ社会では宗教間対話が必須であり、それは単に他宗教との関係のみならず、宗教の多元化によって再構築を迫られている自らの信仰においても重要であると結論づけた。

一方、中田氏は宗教間対話に懐疑的である。宗教間対話により、教義の違いがますます強調され、結果として衝突を増加させる恐れがあるからだ。とりわけこのことは権力的不平等が存在する場合に当てはまる。この場合、誰がその宗教の代表者となるのか、また、その代表者は何を目的として対話するのか、といったことが「強者の動機」「弱者の動機」を中心に遂行され、結局、平行線を辿る非建設的な議論とならざるを得ない。むしろ目指されるべきは法的安定性であり、対話から「宗教」を除くことによる共存のシステムである。この法的安定性のモデルとして、中田氏はイスラームが異教徒との共存のために採用した「庇護契約モデル(イスラーム国際法モデル)」を挙げた。イスラームのMissionは「宣教」ではなく、法治空間の拡大であり、公法に抵触しない限り、私的領域においては各宗教の自治権が認められるのである。

第2回研究会(2004年7月24日)

場所:同志社大学 東京アカデミー

「ユダヤ学のA・トインビー批判 文明の包摂と排除について」  
 手島勲矢(大阪産業大学人間環境学部助教授)  
 「ラビ・ユダヤ教における異教徒との対話」  
 勝又悦子(同志社大学神学部嘱託講師 ヘブライ大学ヘブライ文学部博士課程)

ユダヤ教研究の手がかりとして、手島氏はA・トインビーを、勝又氏はユダヤ教における他者概念を取り上げた。手島氏は、始めにトインビーを論ずることの意味にふれ、トインビーの文明論は当時から多くの研究者に批判されてきたが、現在、S・ハンティントンや、E・サイードに見られるように、今日の研究者のユダヤ教やイスラエル理解にまだ影響を持っているという。そして、トインビーの文明論の根底にある二項対立(ヘレニズム対ユダヤ)に言及し、それに対するユダヤ歴史学者であるピッカーマンの見解、すなわち、ユダヤ社会内部の諸対立が外部のヘレニズムとの関係に影響を及ぼしているという論を紹介した。

勝又氏は、「ミーニーム」という「異教徒」や「異端者」などと訳される外部者に対するユダヤ教の概念を中心に論じた。始めに、「ビルカット・ハ・ミーニーム」という1日3度行われる祈りの中で繰り返される祈禱文のうちの1つを取り上げ、「ミーニーム」の概念の変遷について述べた。また他のラビ文献においても、ラビたちが「ミーニーム」自体や「ミーニーム」の考えを否定しているような記述が見られないことから、勝又氏は、ユダヤ教の「ミーニーム」の概念は他者の拒絶から起こったものではないと結論づけた。

第3回研究会(2004年10月30日)

公開講演会「一神教と多神教 新たな文明の対話を目指して」

場所:同志社大学 今出川キャンパス  
 明徳館21番教室

「一神教と多神教 グローバル経済の謎」  
 中沢新一(中央大学総合政策学部教授)  
 「多神教からの一神教批判に答える 文明の相互理解の指標を求めて」  
 小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)

中沢氏によれば、一神教、多神教とは近代に確立された概念であり、純粋な一神教、多神教というものは存在しない。むしろ、何れの宗教も一神教的要素と多神教的要素をその体系の内に持っている。さらに、一と多の総合的体系は、古くは旧石器時代に見られる宗教体系と構造的類縁性を持ち、一神教的原理と多神教的原理は決して対立概念ではなく、我々人類の知的能力の条件を構成する2つの契機である。さらに中沢氏は、キリスト教の資本主義経済の成立への寄与を指摘した。西方キリスト教会は特異な形で多神教的要素をその宗教体系に組み込むことで、今日のグローバル経済の可能性を切り開いた。今日、経済において宗教は表層的要素(上部構造)と見られがちだが、実は経済が宗教の一形態なのである。

小原氏は始めに、日本の論壇における一神教に対する多神教の優位性を説く発言を多く紹介した。このような安易な二元論は誤解や偏見を助長することになる。そこで、この二元論の解体作業がなさ

れるべきである。まず、神学的・宗教学的に見れば、一神教に真に反対するのは偶像崇拜である。偶像は「出エジプト記」32章の「金の子牛」に見られるように、単に物質的なものに限らず、人間の欲求から生み出されるシステム、イメージ、自己増殖するモノなどを含む。ここから、9・11のテロは経済格差や「構造的暴力」を生み出すシステム=偶像への破壊行為だとも言い得る。また、神道の大東亜共栄圏における神社参拝の強要などを見れば、単純に多神教が文化的に寛容だとは言えない。小原氏は、我々は一神教へのオクシデンタリズム、多神教へのリバー・オリエンタリズムに陥るのではなく、むしろ、穏健派と急進派、多様性の容認と一つの強固な価値観という、現在、各宗教や各国家内で問題となっている思考軸に目を向けるべきだと主張した。

第4回研究会(2004年12月18日)

場所:同志社大学 今出川キャンパス  
 至誠館3階会議室

「イスラーム法における人と人権」  
 奥田 敦(慶應義塾大学総合政策学部助教授)  
 「インドネシアのイスラーム主義における『寛容性』と『排他性』」  
 見市 健(京都大学東南アジア研究所 日本学術振興会特別研究員)

奥田氏は、欧米の文脈と異なるイスラームに基づいた「人権」の性質について説明し、それは人が人であるという理由のみによって与えられる権利であり、福利の実現を目指すものであると述べた。イスラームにはこのような理解がありながらも、実際には人権をめぐる現実と理念の厳しい乖離が存在していると述べ、次に聖典や著名なイスラーム学者の言葉から引用しながら、「人権」守護の可能性について分析した。人権を守護することは基本的に神の手にあるのだが、「人間が労苦をしない限り、神は何事も始めない」という点からすると、人間もまた人権を守護することが可能であり必要とされる。

見市氏は、「福祉正義党」の事例から現代インドネシアのイスラーム主義の寛容性と排他性について論じた。同党は1970年代のインドネシア内の大学における学生運動に系譜を持っており、2004年の選挙では多数の議席を得て大躍進を遂げた。イスラームによるインドネシア国民統一と清廉潔白を掲げ、穏やかな社会のイスラーム化を目指し、メディアによる広告やポップカルチャーのイスラーム文化の拡大に積極的に取り組むという特徴がある。見市氏は、多文化社会のインドネシアにあって、ある程度の政治的自由が確保されている現状において、イスラーム主義は一部のテロ活動を行う少数の団体を除き、「福祉正義党」に見られるように、現実に対応するような形で広がっていくだろうとの見通しを述べた。

部門研究2

「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会



第1回研究会(2004年6月12日)

場所:同志社大学 今出川キャンパス  
 扶桑館2階マルチメディアルーム

「アメリカとシオン 聖地エルサレムをめぐる諸問題」  
 臼杵 陽(国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授)  
 「イスラエル=アメリカ関係の現在 イメージと現実」  
 池田明史(東洋英和女学院大学国際社会学部教授)

今回の発表で臼杵氏は精神史の観点から主としてアメリカの聖地観とエルサレムとの関係を、池田氏は国際政治から見たイスラエル=アメリカ関係を、それぞれ論じた。臼杵氏はアメリカの聖地観について最新の研究も取り上げながら、その傾向にはイスラエルに対して(1)アメリカの西部開拓とユダヤ人のシオニズム運動を重ね合わせる、(2)ユダヤ・キリスト教的伝統を共有するという特徴を、イスラームに対してはそれと対になったネガティブなイメージという特色を読み取ることができると論じ、さらにこのイメージとアメリカのエルサレム問題への対応を歴史的に概観した。留保をつけながらも、臼杵氏は、外交史分析の前に政治指導者の聖地観とエルサレム問題との関係性を検討することが重要であると述べた。

一方、池田氏は、政治指導者にはではなく、国際政治の視点で中東のアメリカのイメージがアメリカの冷戦政策と関連していることに注目する。すなわちそれはアラブ王政諸国との関係、イスラエルとの提携、石油戦略というアメリカの冷戦戦略が、アラブのアメリカに対するネガティブなイメージの形成を育んだということである。その帰結として「アメリカ=イスラエル一体論」というイメージが形成されるが、冷戦期には脅威をめぐってアラブ全体を敵とみなしがちなイスラエルとそう考えないアメリカとの間に認識の相違があり、イメージと現実とずれがあった。しかし9・11テロ以降、アメリカがイスラエルの脅威認識に近づきつつあり、イメージと現実にある種の収斂性が見られ、この趨勢がしばらく続くだろうと、池田氏は結論づけた。

第2回研究会(2004年7月10日)

場所:デスカット東京 会議室

「大統領選挙に向けたアメリカのイラク政策」  
 村田晃嗣(同志社大学大学院法学研究科助教授)  
 「暫定政権成立・主権委譲が抱える問題点」  
 酒井啓子(アジア経済研究所地域研究センター 参事)

今回の発表では、イラクについて村田氏がアメリカの動向について、酒井氏がイラク国内の情勢に

ついてそれぞれ報告を行った。村田氏は、過去の例から7月の時点で大統領候補の支持率が実際の選挙を予想する際にそれほど重視できないことを指摘し、さらにG・W・ブッシュ政権がイラク政策で国際協調路線へ舵を切りつつある現状では、大統領選挙の争点となりにくいと述べた。村田氏は、イラク戦争の3つの問題について、(1)大量破壊兵器についてそれが発見されていない現状であっても、フセイン政権が意図的に曖昧な態度をとってきた責任がある、(2)対テロ戦争について国際テロ組織とイラクの結びつきが戦後顕著になり、アメリカとその同盟国にとって重大な問題を提起している、(3)イラクの体制変換についてアメリカの試みが現段階では成功しているとは言いが、不可能ではないと、述べた。

酒井氏は、治安の回復、経済復興、選挙準備という3つの課題を抱えるイラク暫定政権の現状について政治問題を優先させたいアメリカ、経済回復を図りたい国連、対米不信感も存在するイラク国内・亡命勢力、それぞれの思惑が絡み合って混沌としており、かつ、イラク国民が治安と経済の回復という最低限の義務しか暫定政権に期待していないと述べた。3つの課題の今後の動向について酒井氏は治安について暫定政権の意気込みが感じられる。縁故政治が経済復興の阻害要因となりかねない、国民の信頼を獲得する最後の機会である選挙を滞りなく行うことが重要である、と分析した。

第3回研究会(2004年10月2日)

場所:同志社大学 今出川キャンパス  
 寒梅館6階会議室

「パレスチナ人アイデンティティと政治」  
 北澤義之(京都産業大学外国語学部教授)  
 「現代ユダヤ教とイスラエル・パレスチナ問題」  
 勝又直也(京都大学大学院人間・環境学研究科助教授)

今回は、第1回に引き続き「イスラエルとパレスチナ」について、北澤氏と勝又氏がそれぞれ発表を行った。北澤氏は、自身の研究等をふまえて、中東地域内外の政治状況とパレスチナ人のアイデンティティとの間の相互作用があると述べた。そして北澤氏は、歴史的経緯をあげながら、パレスチナ以外を含めたパレスチナ人の居住地の政治環境がパレスチナ人のアイデンティティに多様性を生み出していることと述べ、最後にアイデンティティの多様性がパレスチナ・アイデンティティに限るものではないと締めくくった。

勝又氏は、イスラエル国内のユダヤ教諸派が宗教的な規律を遵守する程度によって、世俗派、伝統派、宗教派に分類でき、さらにイスラエル国内の宗教派の比率が20%に過ぎないが、その宗教的な影響力を軽視することはできないと述べ、本日の発表では主として宗教派を取り上げた。氏は、イスラエルとアメリカのユダヤ教諸派との比較を行い、ア

メリカでは正統派、保守派、改革派に分類できるが、イスラエルでは「基本的に正統派が公式の宗教グループ」であり、改革派や保守派が「マイナーな存在」であると、両国のユダヤ教派の相違性を強調した。母国を離れたユダヤ教徒の様々な宗派の歴史的な動きを詳細に分析した後、勝又氏は正統派が常に一致した政治的見解を有しているとは言いが、それがパレスチナ問題にも当てはまることを指摘し、パレスチナ問題がユダヤ教内部の対立とも関連していることと結論付けた。

第4回研究会(2004年11月27日)

場所:大手町サンスカイルーム 会議室

「米国保守派の支持基盤と宗教右派の位置づけ」  
 中山俊宏(日本国際問題研究所主任研究員)  
 「分極化するアメリカ 世界との関係を修復できるか」  
 三浦俊章(朝日新聞論説委員)

アメリカ国内の政治状況について中山氏が保守派と宗教右派との関係を、三浦氏がG・W・ブッシュ政権の新旧国務長官の比較を、それぞれ発表した。中山氏は、伝統の浅いアメリカでは将来のビジョンを提示するという特色を持つ保守派が50年代のカウンター・カルチャーの特色である同性愛・中絶容認に反対し、同じくそれに反感を持つ宗教右派のみならず民主党を支持してきたカトリック派をもその政治基盤に取り込んできた歴史的な経緯を解き明かした。そのため、大統領候補者までもが宗教を意識したレトリックを用いるようになり、R・レーガンの大統領就任は保守派と宗教右派の結びつきの結果である。ブッシュJr.もその傾向が顕著に見られるが、幅広い中間層の取り込みのためにはその方針に限界があることを指摘し、さらにブッシュの再選という2004年大統領選挙の結果によって民主党がその支持基盤の建て直しに課題を残すことになったと分析した。

三浦氏は、アメリカ勤務の経験のあるジャーナリストの視点から、C・パウエルとC・ライス新旧国務長官のパーソナリティの比較分析することによって、ブッシュ第2期政権下のアメリカ外交の将来の方向性を推論した。パウエルはアフターマティヴ・アクションや統規制に賛成し、イラク戦争にも慎重な姿勢を見せたが、自身の明確なビジョンを持つ人物ではなく、実務家型であり、この点がいわゆるネオコンと異なる。またライスも、秀才ではあるが、自身の見解を表明する人物ではなく、他者と軋轢を起こすことは少ないだろうという。この結果、ライス国務長官によってアメリカ外交が大きく変化することはないかと、三浦氏は予測する。

本年度(2004年度)活動

[ 特定研究プロジェクト ]

本年度より新しく2つの特定研究グループが組織され、より地域に特化した専門的研究を行うことになった。各プロジェクトの概要は次の通りである。

特定研究プロジェクト1

「ヨーロッパにおける宗教政策」  
代表 石川 立(同志社大学神学部助教授)  
ヨーロッパ、とりわけドイツ、フランス、イギリスの政府機関が、それぞれの国の宗教状況に対してとっている宗教政策を研究する。ヨーロッパにおける多様で多層的な宗教的状况に関して、情報収集と分析を行うと共に、政府機関がそれをどのように捉え、評価し、どのような形で対処しようとしているかを調査、考察することを旨とする。また、各国と並行して、EU全体の宗教政策についても詳細に調査と分析を行っていく。

特定研究プロジェクト2

「イラン・イスラーム体制における西欧理解」  
代表 富田健次(同志社大学大学院神学研究科教授)  
米国に代表される現代西欧とイスラームとの間の緊張と軋轢を考察するうえで、看過し得ない存在であるイラン・イスラーム体制に焦点をおき、その対西欧・米国公観が宗教的・文化的・歴史的に如何なる形態や属性そして構造を有するか、その分析と考察のための基礎的知識を重層的に蓄積する作業を行い、最終的には現代西欧や米国からの視点と有機的に繋ぐことを目指す。

[ 活動報告(2004年度) ]

2004年

**4月13日**  
特定研究プロジェクト2:研究会(1)  
ペルシア語論文講読会:モフセン・キャディーヴァル「法学者と政治」(2004年3月18日初回研究会での発表原稿)

5月19日

特定研究プロジェクト2:研究会(2)  
モフセン・キャディーヴァル「法学者と政治」講読

6月29日

特定研究プロジェクト2:研究会(3)  
モフセン・キャディーヴァル「法学者と政治」講読

7月2日

特定研究プロジェクト2:研究会(4)  
発表者:松永泰行(同志社大学客員フェロー ニューヨーク大学)  
第1部「イラン国家選挙結果から見たイラン・イスラーム体制の現状と将来」  
第2部「イラン改革派敗退とブッシュ政権の大罪」  
7月17日  
公開講演会  
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂  
小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)

「イスラームとの対話 日本がドイツから学ぶべきこと」  
**7月20日**

特定研究プロジェクト2:研究会(5)  
モフセン・キャディーヴァル「法学者と政治」講読

8月4-6日

アラビア語(初級)インテンシブ・クラス  
**8月14-29日**  
マレーシア異文化理解・語学研修プログラム  
「異文化理解・語学研修センター」(CISMORマレーシア海外研究拠点)設立  
**8月17-26日**  
イスラエル研修プログラム

9月4-14日

アメリカ宗教研修プログラム  
**9月21日**  
特定研究プロジェクト2:研究会(6)  
モフセン・キャディーヴァル「法学者と政治」講読

10月28日

特定研究プロジェクト2:研究会(7)  
発表者:中田考(同志社大学大学院神学研究科教授)  
「ムフスイン・キャディーヴァルのシーア派国家類型学」  
**10月30日**  
公開講演会「一神教と多神教 新たな文明の対話を目指して」  
会場:同志社大学 今出川キャンパス 寒梅館ハーディーホール  
中沢新一(中央大学総合政策学部教授)  
「一神教と多神教 グローバル経済の謎」  
小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)  
「多神教からの一神教批判に応える 文明の相互理解の指標を求めて」

11月10日

特定研究プロジェクト2:研究会(8)(第2回文化庁国際文化フォーラム参加行事)  
「イスラーム学から見た欧米型民主主義 モハググダーマード師に聞く」  
モスタファ・モハググダーマード(イラン科学アカデミー・イスラーム学部長)

11月13-14日

2004年度 CISMOR 一神教聖職者交流会議「現代アメリカのユダヤ教・キリスト教・イスラームが直面する諸問題」

11月20日

特定研究プロジェクト1:公開講演会  
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂  
フリードリヒ・W・グラーフ(ミュンヘン大学神学部教授)  
「ヨーロッパにおけるグローバリゼーションと宗教」

11月24日

特定研究プロジェクト2:研究会(9)  
発表者:松永泰行(同志社大学客員フェロー ニューヨーク大学)  
「選挙結果から見るイラン・イスラーム体制の現状と将来」

12月22日

特定研究プロジェクト2:研究会(10)  
発表者:富田健次(同志社大学大学院神学研究

科教授)  
「イラン保守派の政治思想」

2005年

**1月22日**  
部門研究1、2合同研究会  
発表者:白石 隆(京都大学東南アジア研究所教授)  
「アメリカと東南アジア」  
田原 牧(東京新聞特別報道部記者)  
「アメリカの中東戦略の展望 冒険主義と思考停止の狭間で」  
コメンテーター:中山俊宏(日本国際問題研究所主任研究員) 石川 卓(東洋英和女学院国際社会学部助教授) 見市 健(京都大学東南アジア研究所 日本學術振興会特別研究員)

1月26日

特定研究プロジェクト1:研究会(1)  
発表者:内藤正典(一橋大学大学院社会学研究科教授)  
「トルコのEU加盟問題からみたヨーロッパとイスラーム世界の関係」  
コメンテーター:小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)

1月27日

特定研究プロジェクト2:研究会(11)  
発表者:嶋本隆光(大阪外国語大学助教授)  
「M・モタッハリーの指導者論 12イマーム派シーア主義の政治と倫理」

2月

学術雑誌『JISMOR(一神教学際研究)』創刊  
**2月12-13日**  
アラビア語(中級)インテンシブ・クラス  
**2月14-15日**  
現代ヘブライ語インテンシブ・クラス  
**2月19日**  
公開シンポジウム「戦争・平和・宗教 日本とドイツ」  
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

イエレン・ティーセン(ドイツ連邦軍社会科学研究所所長)  
「国際安全保障政策におけるドイツの役割 経験と期待」  
小川和久(軍事アナリスト)  
「日本の安全保障論議を科学的に論考する」  
コメンテーター:小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)

3月3日

特定研究プロジェクト1:研究会(2)  
発表者:ドロン・コヘン(同志社大学神学部嘱託講師)  
「反セム主義 ヨーロッパにおける歴史的背景と現状」



3月5-31日

CISMOR Month  
「一神教をめぐる現代の課題 異文化理解/メディア/世俗化/起源」  
現代世界の動向を理解するために必須ともいえる一神教(ユダヤ教・キリスト教・イスラーム)についての認識を深めるため、公開講演会を連続して開催した。多様なテーマを切り口にして、一神教をめぐる課題を考察した。  
会場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂  
5日 バーバラ・B・ジクムント(同志社大学大学院アメリカ研究科教授)  
「日本での生活は、いかに私の一神教理解を変えたか」  
12日 モスタファ・レズラーズィー(前アルジャズィーラ東京オフィス・プロデューサー)  
「マスメディアと宗教 日本のマスメディアによるイスラーム世界の報道」  
23日 タラール・アサド(ニューヨーク市立大学教授)  
「法・道徳・宗教を考える エジプトの近代化を振り返って」  
31日 ビーター・マシニスト(ハーバード大学神学校教授)  
「一神教による古代イスラエル再考 最近の議論のいくつかの反響」

国際宗教学宗教史会議第19回大会パネル  
第19回国際宗教学宗教史会議世界大会が3月24日から30日まで東京の高輪プリンスホテルで開催される。大会の総合テーマは「宗教 相克と平和」である。この総合テーマの下で5つのサブテーマでパネルがもたれる。1.戦争と平和、その宗教的要因 2.技術・生命・死 3.普遍主義的宗教と地域文化 4.境界と差別 5.宗教研究の方法と宗教理論。28日には一神教学際研究センターからもパネルに参加することになった。

3月28日

「イスラーム・キリスト教世界における暴力・戦争をめぐるディスコース」  
司会:バーバラ・B・ジクムント(同志社大学大学院アメリカ研究科教授)  
発表:  
森 孝一(同志社大学大学院神学研究科教授)  
「ブッシュ大統領と対テロ戦争の大義」  
中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)  
「イスラーム世界の現状とソフトをめぐるディスコース」  
小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)  
「一神教と多神教をめぐるディスコースとリアルポリティーク」

編集後記

同志社大学 CISMORのブログを開設しました。ここでは、CISMORウェブサイトの情報を補充するような、鮮度の高い情報をお伝えしていく予定です。

具体的には、講演会の早期の案内、行事予定、CISMORメンバーの著書・論文・新聞記事の適宜の紹介、CISMOR来訪者紹介、研究会の報告速報、などをスピーディに掲載していくつもりです。このブログのアドレスをブックマークに登録して、ぜひ時々のでいでみてください。



http://cismor.exblog.jp

CISMORIは一神教だけをやっているわけではなく、多神教にも大きな関心を持っています。研究対象には一神教だけでなく、多神教もまいるのです。この『CISMOR VOICE』でも多神教を取り上げたいと思っています。その場合、特集する都市をどこにしたらよいか悩むところです。どこか推薦したい都市がございましたら、CISMORまでお知らせ下さい。ちなみに次号は「ニューヨーク」を予定しています。ご期待下さい。(ネアン)

来訪者記録

日付	氏名	所属機関
2004年		
4月5日	ヘンドリック・M・フルーム教授	アムステルダム自由大学神学・哲学部
4月21日	エリ・コヘン大使	在日イスラエル大使館
4月26日	エリザベス・ゲール助教授	ルンド大学
5月3日	オースルフ・ランデ教授	ルンド大学神学・宗教学部
5月12日	アンジェリカ・デルフラー研究員	ドイツ連邦軍社会科学研究所
7月17日	ラインハルト・ルートヴィヒ副領事	ドイツ連邦共和国総領事館
10月6日	アブドゥッラー・M・マンハム研究員	在サウジアラビア日本大使館
12月15日	河井明夫専門調査員	在サウジアラビア日本大使館
2005年		
1月28日	セツ・アフターブ教授	慶應義塾大学
2月8日	ソロモン・シンメル教授	ヘブライ・カレッジ(アメリカ)
2月19日	カール・ヴォカレック総領事	ドイツ連邦共和国総領事館

CISMOR事務局編集部

越後屋 朗 下村裕子 中村明日香 長谷川(間瀬)恵美 藤田敦子 横田 徹

発行 同志社大学 一神教学際研究センター(CISMOR)

〒602-8580  
京都市上京区今出川通烏丸東入  
TEL 075-251-3972  
FAX 075-251-3092  
E-mail: staff@cismor.jp  
http://www.cismor.jp



編集 CISMOR事務局編集部

執筆協力 サミール・ノウフ 上原 潔 小出輝章 高田 太 竹田アマニー  
中田 考 水原 陽  
デザイン 有限会社真之助事務所  
印刷 日本写真印刷株式会社

## ナツメヤシの秘密

ラマダーン月（イスラームの断食月）の一ヶ月間、ムスリムは毎日、夜明け前から日没までの時間、断食をする。一日の断食を終える日没時、食卓には様々な料理が並べられる。その中で真っ先に登場するものがナツメヤシの実であり、アラブ諸国を始め、イスラーム世界では重要な位置を占めるものとなっている。ナツメヤシの実によって断食を解くことは、預言者ムハンマドの慣行（スンナ）に従うものだからである。

ナツメヤシは、長期間にわたって保存が可能であること、そして栄養価がとても高いということから、古くはアラブ遊牧民にとっての主食であった。

エジプトでは、一日の断食を終える夕刻時に、まず、そのナツメヤシの実の入った飲み物を口にするのが慣例となっている。その伝統的な飲み物は「ホシャーフ」と呼ばれており、作り方は以下に述べるとおりである。

まず、干しあんず「アマルツディーン」を手でちぎり、それを水洗いした後、水にしばらく浸す。ある程度柔らかくなったらミキサーに入れ、ペースト状にする。そして、それをさらに水で薄めてから、そこに種を取ったナツメヤシの実を入れ、よく混ぜて出来上がり。さらにそこにピーナッツ類やココナッツなどを加えて飲むこともある。また、ナツメヤシの実を牛乳に入れて一緒に煮込んで飲むという仕方もあり、「タムル・ピッラバン」と呼ばれている。

ラマダーンの期間中、ナツメヤシに因んだ飲み物や食べ物が発卓にお目見えするのは、エジプトだけではない。他のアラブ諸国でも様々なナツメヤシの料理が登場する。例えば、チュニジアではナツメヤシの種を取り除き、かわりに適当な大きさに刻んだバターを中に入れて食べるというのが、伝統的な食べ方となっているらしい。

日本では、お好み焼きソースなどの原料としてナツメヤシが使われてきたが、最近では、健康食品としても、この栄養価の高いナツメヤシ「デーツ」が注目されており、大人気となった。

アラブ諸国をはじめ、ナツメヤシは多くのお菓子にも使われている。特に、ラマダーン月の間は、食卓から町中のいたる所まで、このナツメヤシのお菓子が姿を現す。

ナツメヤシの実には、ビタミン、カルシウム、鉄分などが豊富に含まれており、一日の断食によって不足してしまった栄養素を、その一口によってあっという間に回復してくれるのだから、なんとも驚きの食べ物である。まさに、恵み多き実であると言える。

